



TITLE:

恩師追懷餘録

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 恩師追懷餘録. 經濟論叢 1934, 39(2): 284-286

ISSUE DATE:

1934-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130480>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 二 第

卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀 辭

故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論 叢

骨牌税に就きて………

供給曲線の性質………

時 論

輸出統制の諸問題………

研 究

貨幣的景氣論史………

金物價と貨幣價值安定………

アダム・スミスの廉價即豊富論………

記 事

田島博士逝く

故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

織田 萬

河田 嗣郎

汐見 三郎

谷口 吉彦

神戶 正雄

本庄 榮治郎

黒 正 巖

山本 美越乃

小島 昌太郎

田 島 順

財部 靜治

大國 壽吉

石川 興二

法學博士 神戸 正雄

文學博士 高田 保馬

經濟學博士 谷口 吉彦

經濟學士 柴 田 敬

經濟學士 松岡 孝兒

經濟學士 白杉 庄一郎

新着外國經濟雜誌主要論題

附 錄

恩師追懷餘錄

財部 靜治

一、不肖遣歐の命を奉じ南獨民顯に笈を負ふや月毎に學資を割いて家郷に送るを例としたり然るに時は大正十四年夏世界の大戦となり學友相舉りて居を英京に遷すや一私事としての斯例は杜絶さるるの外なかりきその間先生並に令夫人如何にして之を聞知し給ひしか同一金額は五ヶ月に亙り先生により月々我家婦の許に届けられたるを歸朝の後に到り始めて知れり恩師の鴻德及ぶ事學事以外に弘きを深く覺りし一例なり。

一、明治三十有四年郵便貯金に割増金を附するの議世上に聊か起りたり當時一學生の身を以てその得失を論辯致したり然るに師そを冗漫に渡ると想はれしか途中にして中止を命ぜらるされど不肖之に従はず先生の激怒を覺悟しつつ再三回の注意を受けて後始めて演を結びたり圖らずやこは却つて機縁となり師の恩顧を溼

うし得るの因となれり赤城先生の雅量廣かりしこと以て察すべきなり。

一、不肖民顯に學ぶこと未だ一年ならざるに先生第二次外遊の途次同地に立寄りホテルに泊るを避けられ特に我寄寓所の別室に安んぜられ約一週日を過ごされたり其間日夕同輩及予を引具して巡覽せられ以て吾等の旅情を慰められたり偶々予も亦單身同市目貫の町に隣りたる「E街舊式樓屋の高階に營業せる「王冠肉料亭」Kronfischkücheに先生を案内したり然るに出し來れるBeck木の柄のナイフ及フォークなるはまだしも皿迄木製たり而して盛り來れる「王冠肉」は實に牛の横隔膜たり同亭は臓物料理を以て聞へ常の客は勞働者小吏員なりされどその價廉なるがためにその以外の人々も微行してここに通ふとは案内記に誌るす所なり巴威里の都に居ること數年なるに此店を知らざりし人多し師之に興を深くせられたるか歸朝の後も先生に蹤きて宴席に列せる際談笑の間之を口にせられたること屢々なりき先生酒を嗜まれしと共に食の口嗜に多大の

雅趣を寄せられしや後進として敬慕すべきもの多きを懷ふ。

一、朱文公の一絶「才子恃才愚守愚、少年才子不如愚、請看他年成業後、才子不才愚不愚」とは少年に際し亡養父により授けられし訓戒の一なり然るに業を先生に受くるの奇縁偶々相遇へりと謂ふべきか恩師別號を守愚生とせられしことを知れるは恰も亦十有餘年前にあり春秋幾載か廻りて時は大正十二年師海外派遣の命を奉ぜらるるや時の感想を一絶句に寄せられたる初稿の寫しと拜察せらるるを萬年筆の走り書にて刺の裏面に記し迂生の許に寄せられたるの榮に接したりその詩に「將三遊米歐有作」と題し「誰謂再斯可、米歐三曳筇、由來天地濶、未必踏前蹤」と詠ぜられ之に附するに守愚老生の號を以てせらるるその號により謙讓の德を示し乍ら之と共に軒昂の意氣を此一絶にも表せられしや今猶驚嘆して措かざる所なり。

一、歐米經濟學者流に文明は自然を制するにありと口にするの説多し小輩の不敏なる制限なしにて是に服

追　憶　文

する能はず一夜師の門に拜芝して高教を仰ぐ指掌一言にして發し來れり人事を盡して天命を待つと事に遇ひしは十有餘年前にあり其高見眞に偉大なりしを今猶心に銘して忘るる能はず。

一、近年師の警咳に接するや談易經に及ばざりし事無かりき先生の愛藏せられたる易の註釋書記するにも猶勞を要したり謂ふを止めよ儒徒らに酒に淫すと杯間自から閑日月に富むの境地あることを回顧するの良藥とすべきなり然るに恩師今や溘焉として逝かる人生の悲哀悟らんとして覺る能はず。

一、本年二月長兒の婚儀を表するや恩師その席に駕を枉げ給ひ不肖は永き間の弟子なるに三十年以來の友と仰せ給ひ又此父にして此子ありと宣へ玉ふ當らずと想ひしも時と共に感深きを禁じ得ざりき其恩愛永く偲ばんとするも今や既に訪ぬるに由なし嗚呼哀情に驅られきて取りにし筆も立ちあぐむなり。